



第1回

部族国家アメリカ

トランプ時代の合衆国から

「チヨコレートシティ」

ライター 福田伸生

デモクラシーとアパルトヘイト

忘れられない光景がある。五十四年前、暑い夏の日だった。サンドラ・バトラー・トゥルースデールは母と二人でバスに乗っていた。ホワイトハウスを通り過ぎ、コンステイテューション・アベニューに着くと、ナショナル・モールの芝が見えない。広大な緑地は人埋め尽くされていた。

これほどたくさん黒人を見たのは初めてだった。小学生から白髪の老人まで、女も男も手製のプラカードを掲げ、「自由を」「平等を」「職を」と声を上げている。バスを降りて見回すと、白人もかなり多い。中南米系や日系人もいるようだ。

夢見る」。一九六三年八月二十八日の「ワシントン大行進 (The Great March on Washington)」である。

キングの演説に誰もが胸を打たれた。けれども、この日、彼女に最も強い衝撃を与えた言葉は「I have a dream」ではない。それは、キングに先立って登場した黒人の女性歌手リナ・ホーンが叫んだ一言だった。「Freeeee-dommmmi!」

フリーダム (自由を)。八秒をかけてこの言葉だけを残し、ホーンは演壇を後にした。「黒人の女も自由に声を上げていいのだ。あのとき、初めてそれを知った」

サンドラは当時二十三歳の大学生だった。翌年女の子を出産する。子供の父親とは結婚しなかった。大学を中退して一人で育て始めた。

あの日を振り返ってサンドラは言う。

「グレート・ファイリングだったわ。歩きながら、愛とか前へ進もうという気持ち全員が共有していた。肌の色も宗教も、男も女も、有名も無名も誰も気にしない。みんながあのままで平等そのものだった」

サンドラは一九三九年にワシントンで生まれた。父はキューバ移民の息子で、フロリダからワシントンの

人の群れは緑地の西端に位置するリンカーン記念堂へ向かってゆつくりと進んでいく。サンドラと母も歩き始めた。すぐ横で見上げるほど長身の黒人男性が大股で歩を進めている。テレビで見覚えのある顔だ。「プロバスケットボールのウィルト・チェンバレンだった。驚いたわ」。一試合に一〇〇得点を挙げた記録で知られる名選手である。

奴隷解放を宣言した第十六代大統領リンカーンの巨大な石像が腰を下ろす記念堂前で、人権団体や労働運動、宗教指導者が次々に黒人差別の不当と人種「統合」の実現を訴える。集会の終盤、マーチン・ルーサー・キング・ジュニアが呼びかけた。「肌の色ではなく人格で四人の我が幼子が評価される。私はその目を

カトリック系学校に進学した。母はワシントン生まれの黒人である。両親はともに連邦政府で働いていた。父は印刷局、母は国税局が職場だった。

近所のドラッグストアには白人専用のランチカウナーがあった。黒人は買った食事を路上で食べるか、家へ持ち帰る。不思議だった。

母に連れられてダウンタウンのデパートへ行った。気に入ったドレスを見つけたけれど、試着室を使わせてくれない。食堂にも黒人の客はいなかった。

伝統ある劇場「ナショナル・シアター」へ母と出かけた。ステージに近い一階席には白人客しか座れない。黒人は階段を上ってバルコニーへ行かされた。ファシズムと戦ったデモクラシーの首都に「アパルトヘイト」が根を下ろしていた。

成果としての黒人大統領

戦間期から第二次大戦直後にかけて、ワシントンで人種差別に抵抗する運動が起きた。連邦政府のカフェテリア、空港の食堂とバー、ダウンタウンの飲食店やデパート、タクシー会社、そして学校に、黒人たちが開放を迫ったのである。まず説得と抗議を試み、効果が